

天下一品

小川未明

青空文庫

ある日のことひであります。男おとこは空想くうそうにふけりました。

「ほんとうに、毎日まいにち働たらいても、つまらない話はなしだ。大金持おおがねもちに

なれはしないし、また、これという安楽あんらくもされない。ばかばか

しいことだ。よく世間せけんには、小判こばんのはい入はいった大瓶おおびんを掘ほり出だしたと

いううわさがあるが、俺おれも、なにかそんなようなものでも掘ほり出だ

さなければ、大金持おおがねもちとはならないだろう。」と、その男おとこは、

いろいろなことを、仰向あおむいて考かんえていました。

すると、たなの上うえに乗のっていた、古ふるい仏像ぶつぞうに目めが止とまりました

た。昔むかしから、家いえにあつたので、こうしてたなの上うえに乗のせておいた

のです。仏壇ぶつだんの中なかには、あまり大おおきすぎはいて入はいらなかつたからで

あります。

「あの仏像が、金であつたら、たいへんな値打ちのものだろうが、どうせそんなものでないにはきまつている。それに手が欠けていて、どのみち、たいした代物ではない。しかし、あの仏像がよいものであつて、値が高く売れたら、どんなにしあわせだろう。俺は、たくさんの田地をかうし、また、諸国を見物にも出かけるし、りつぱな着物も造ることができらう。」と、男は、黒くすすけた仏像を見ながら考えこんでいました。

家の外には、もうすすめがきて餌を拾つて鳴いていました。いづもなら、男は、くわをかついで圃に出なければならぬ時刻でありましたが、なんだか働くということがばかしくなつて、

その気きになれませんでした。

男おとこは、立ち上たがあつて、たなの上うえからその仏像ぶつぞうを取り下とろして、つくづくとながめていました。ほんとうに、手てに取とつてこうしてながめるといふようなことは、幾いくねん年ねんの間あいだ、いままでになかったのです。また、見みれば見みるほど、それがいいもののようにも思おもわれてきました。

もうこの世よにいない父親ちちおやが、あるとき、旅たびのものからこの仏像ぶつぞうを買かつたといふことを聞きいていました。

「こりや、いいものではないかしらん。」と、彼かれは、ますます考かんがえはじめました。

村むらに、なんの職しよくぎよう業ぎようということもきまらずに、日ひを送おくつてい

るりこう者がありません。村の人々は、その人をりこう者とい
つていました。この人に聞けば、役所の届けのことも、また書
画の鑑定も、ちよつとした法律上のこともわかりましたの
で、村の中の物識りということになっていました。しかし、その
人は、あまりいい生活をしていませんでした。地所の売買や、
訴訟の代理人などになって出て、そんなことで報酬を得
て、その一家のものは暮らしていたのですが、物識りという名が
通っているのです、このもののいったことは、村では、たいていほ
んとうにしていたのです。

「あの物識りのところへ持って行って、見てもらおうかしらん。
どうせつまらないものでも、もともとだ、万一一い代物であつ

たら思おもわぬもうけものだ。人にんげん間の運うんというものは、どういうところところにないともかぎらないから……。」と、男おとこは、ほこりだらけの仏ぶつぞう像ぞうをひねくりながら考かんがえていました。

やがて、男おとこは、それをふろしきに包つつみました。そして、これをかかえて家いえから出でかけました。野のらの間あいだの細ほそ道みちを通とおりますと、もうみんながせつせと働はたらいています。自分じぶんも、今日きょうあたり芋いもに肥こえ料えりょうをやるのであつたがと、男おとこは、左さ右ゆうを見みまわしながら歩あるいてゆきました。

物もの識しりは、家いえに、つくねんとしてすわっていました。男おとこが、仏ぶ像ぶつぞうをかかえて入はいつてきたので、物もの識しりは、きつとなにかの鑑かん定ていだなと思おもつて、男おとこを歡かん迎げいいたしました。

「さあ、ようこそお早くおいでなさいました。」と出てきて、ぴかぴかはげた頭あたまを振りたてていいました。

「ほかでもありませんが、これをひとつ見ていただきたいとおもいました。」と、男おとこはいいました。

「なんでございますか。」と、りこう者ものは、包みつつの上うえからにらみました。

「仏像ぶつぞうです。」

「これは、けっこうなものものしです。」と、物識りものしは、見ぬ先みさきから、おそれいったふうにいいました。

「そんないいものですが、どうせつまらないものです。」と、男おとこはふろしき包みづつを解といて、黒くろくなった仏像ぶつぞうを彼かれに

渡わたしました。

「なるほど。」と、うなずいて、りこう者ものは、その仏像ぶつぞうをいただいてから、しばらく、しみじみと見入みいっていました。

男おとこは、その間あいだ、なんとなく胸むねがどきどきいたしました。恐ろしい宣告せんこくを受うけるような気持きもちがしたのです。

「どうですか？」と、男おとこは、ついにたまりかねてききました。

「まことに、けつこうな品しなです。」と、りこう者ものはただいっただきりで、あくまで仏像ぶつぞうに見入みいっていました。男おとこは、その言葉ことばを信じられしんないような、へんな気持きもちがしました。

「つまらないものでしょうが……。」と、男おとこは危あやぶみながらいいました。

「てんか天下一品びん、安やすくて千両りようの値打ねうちちは請うけ合あいです。」と、りこものう者は感かん歎たんいたしました。

それが、いよいよほんとうだと知しると、男おとこは、夢ゆめのような気持きもちちがして、驚おどろいたというよりは、頭あたまがぼうとしました。

彼かれは、思おもいきつてたくさんな鑑かん定てい料りようを出だして、仏像ぶつぞうを堅かた

くしつかりと抱いだいて、もときた道みちをもどりました。みんなは、い

つしようけんめいに、せつせと太たい陽ようの輝かがく下したで働はたらいていました。

高たかい空そらのあなたから、太たい陽ようは、柔にゆう和わな目めつきをして、働はたらいて

いる人々ひとびとを見守みまもっているようでありました。しかし、男おとこは、も

う芋いもに肥こえ料りょうをやることなどは、まったく忘わすれてしまつたように、

てんで目めは田圃たんぼの上うへなどに止とどまりませんでした。

「あの物識りのいうことに、まちがった、ためしが無い。ことに、
 今日きょうはほんとうに感心かんしんしたようすでいった……安やすくて、千両りょう：
 ……まあ、なんとという大金たいきんだろう。俺おれは、夢ゆめを見ているのではあ
 るまいかしらん。いや、たしかに夢ゆめでない。千両りょう……買かい手てによ
 って千五百両りょうにもならないともかぎらない。その金かねを俺おれは、どう
 して使つかつたらいいだろう。」と、男おとこは、もう氣きが氣きでなく、体からだじ
 ゆうが熱ねつに浮うかされていました。

物識ものしりが、「天下一品てんか びん」といった仏像ぶつぞうが、この村むらの中うちにある
 といううわさが、たちまちあたりにも広ひろまりました。我われも、我われもと
 いて、みんなが男おとこのところへ仏像ぶつぞうを拝おがみにまいりました。

「ありがたそうなお顔かおをしていらつしやる。」とか、「慈悲じひ深い

お目めをしていらつしやる。」とか、または、「なんとなく神々こうごうしい。」とか、みんなが仏像ぶつぞうの前に立たつていいました。

「これが千両りやうも値打ねうちのある仏ほとけさまですか。」と、中なかには、おそるおそる近寄ちかよつてながめる人ひとたちもあつたのです。

すると、この村むらに、大金持おおがねもちで、たくさんの小作人こさくになんを使用しようして、また銀行ぎんこうに預金よきんをして、なにをすることもなく、日ひを送おくつている人間にんげんがありました。欲ほしいものは、なんでも買かいました。見みたいところへは、みんないつて見みてきました。しかし、まだ、自分じぶんをなにひとつ満まん足ぞくさせるものはありませんでした。金かねはいくらあつても、それだけでは、この世よの中なかがおもしろくはありませんでした。どうか天下一品てんかひんのものがほしい。だれもほかに

も持っているものがないような珍しいものを手に入れたい、と、日ごろから思っていました。

その金持ちの耳に、天下第一品の仏像が村にあることが入りました。しかも、目下のものの家にあると聞くと、金持ちは、もはやじつとしてはいられませんでした。さつそく、その男のところへ出かけてゆきました。

「今日は。」と、金持ちは、男のところをたずねました。かつて、金持ちが、この男の狭い、うす暗い家を訪ねるようなことは、ありませんでした。

「だんなさまでございますか。」と、男はいつて、金持ちを迎えました。

「ほかではないが、天下一品という仏像を見せてもらいにきた。」と、金持ちはいいました。「いよいよ俺の運が向いたぞ。」と、男は、心の中でいいました。

「仏像というのは、あすこに祀つてあるあれでございます。」と、男はいいました。

いつのまにか、たなの上は、きれいになつて、仏像の前には、花やお菓子などが、並べてあつたのです。

金持ちは、それがどんな姿であろうが、かまいません。金の力で天下一品が手に入れられるものなら、なんでもそれを自分のものにしたかつたのです。

「あ、なるほど。」と、金持ちは、軽くうなずいて、それを手に

取つてつくづくと見ていましたが、

「なかなかいい作だ。よほど古いものだ。私はまだこれよりもいいものを見たことがあったが、この像もなかなかいい。手の欠けているのは惜しいものだ。私は、仏像が好きなので、どうか一つ手に入れたいと思つていたが、どうだろう、この像を譲つてもらえまいか。」と、金持ちはいいました。

男は、腹の中では、ほくほく喜んでいましたが、口では、そういわなかつた。

「天下第一品といえますので、安くて千両だと、あのりこう者がいいました。なにしろ先祖代々の宝物でございまして、なるたけ売りたいはないと、思つています。」と、男は、さもさもらし

く答えました。

そう聞くと、金持ちは、ますますこの仏像がほしくなりま
た。

「どうだ、千両で私に売ってはくれまいか。」と、金持ちはいい
ました。

男は、二千両も、もつと高くも売りたかつたのです。

「まあ、考えてみましょう。」と、あいさつをしました。金持
ちは、自分のほかには、千両も出して、この仏像の買い手は、あ
まりあるまいと思ひましたので、その日は、それで帰つたのであ
ります。

隣村に、もう一人金持ちがありました。この金持ちも天下

一品びんの仏像ぶつぞうがぜひ見みたくなりました。それで、わざわざ男おとこのも
とへやつてきました。

「どうか、仏像ぶつぞうを拜おがましてももらいたい。」と頼たのみました。

「さあ、どうぞごらんくださいまし。仏像ぶつぞうはあれでございませ
。」と、男おとこは、たなの上うえの仏像ぶつぞうを指ゆびさしました。

「あ、あの仏像ぶつぞうですかい。地金じがねは黄金おうごんですか、なんでできて
いますか。」と、隣となり村むらの金持かねもちは聞ききました。

「さあ、地金じがねのことは、ぞんじませんが、鑑かん定ていしてもらうと、
安やすくて千両りょうの値打ねうちがあるとのことです。先せん刻こくも、村むらのだんな
さまが見みえて、千両りょうで譲ゆずってほしいといわれました。」と、男おとこは
話はなしました。

「じゃ、千両りょうで買かい手てがあるのでですかい。」

「さようでございます。」

「どうだ、私わたしに、千三百両りょうで譲ゆずってくださいませんか。」と、隣となりむ

村らの金持かねもちは頼たのみました。

おとこ

男おとこは、しめたものだと、心こころの中うちで思おもいましたが、けっして、顔かお

には見みせませんでした。

「なにしろ、先祖せんぞ代だい々だからの宝物ほうもつですから、なるべくなら手て

放ばなしたくないと思おもっています。よく考かんえてからご返事へんじ申もうしあげま

す。」と、男おとこは答こたえました。

隣となりむら村かの金持かねもちは、またくるといつて、その日ひは帰かえつてしま

いました。

後あとで、男おとこは、これは、またなんというしあわせが自分じぶんの身みの上うえにわいてきたものかと考かんがえると、頭あたまがなんとなくぼんやりしてしましました。そして、それからというものは、仕しごと事が手てにつかず、
 圃はたけへも出でませんでした。男おとこは、口くちの中なかで、千三百兩りやう……と、口くちぐ
 癖せになつて、繰くり返かえして、いつていました。
 「地所じしよを買かうこともできる。見物けんぶつに出でかけることもできる。」
 と、独ひとり言ごとをして、夜よが明あけると、日ひが暮くれるまで、夢ゆめを見みるよ
 うな気持きもちちでいました。すると、そのとき、
 「この田舎いなかでさえ、千兩りやうや、千三百兩りやうで売うれる仏像ぶつぞうだ。町まちへい
 つて見みせたら、もつと、高たかく売うれないともかぎらない。」と、あ
 る人ひとは、男おとこに向むかつていいました。

おとこ
男も、なるほどと考えました。そこで、その仏像を大事に包んで背中におぶつて、町へ出かけてゆきました。途中も、男はただ一つ事しか考えていませんでした。そして、口の中では、千両……千三百両……といつて歩いていました。

おとこ
男は、ついに町へ出ました。そこには、大きな骨董店がありました。男は、まずその店へいつて見せようと思ひました。そして、店先に立つて、なるほど、たくさんいろいろな仏像や、彫刻があるものだと、一通り飾られてあるものに目を通したのです。

「いくらいいものがあつても、俺の背中にあるような、天下一品はここにもあるまい。」と、男は心の中でいいながら、ながめて

いました。

すると、たなかの中ほどのところに、寸分違わない、仏像が置いてありました。男は、これに目が止まると、はつと驚きました。そして、自分の目のせいでないかと、なお、大きく目を開けてじつと見ますと、まさしく、自分のおぶつっている仏像と、古さから、形まで違わないばかりか、しかも手も欠けていず、完全な仏像でありました。

「天下第一品が、ここにもあるぞ。」と、男はたまげてしまいました。そしていくらするものだろうと思いましたが、男は、店のなかへい入って、きわめて平気を装って、その仏像の値を聞いてみました。

「あのたなの中ほどの古い仏像ですか、おまけして、五両でよろしゅうございます。」と、番頭は、答えました。

「五両？」と、男はいつて、耳を疑いました。千両……千三百両……が、五両？ きつとこの番頭は盲目なのだ。俺は、一つを村の大尽に千両で売り、一つを隣村の金持ちに、千三百両で売つてやろう。

こう、とつさの間に男は思いました。彼は、財布をはたいて、五両でその仏像を買いました。そして、それを横抱きにして、大急ぎで村を指して帰つてきました。

家に帰つてから、背中の仏像をおろして、買つてきたのと二つ前に並べてみますと、まさしく寸分も違つていませんでした。

男は、手の欠けていない仏像をふろしきに包んで、それを持って、隣村の金持ちの家へ出かけてゆきました。

金持ちは、家に行きました。男を見ると、笑顔で迎えました。

「仏像を持ってありがとうございました。」と、男はいいました。

「あ、それは、それは、じゃ、先日値で売ってくださいるか。」と、金持ちは、大喜びでした。そして、男の出した仏像を押し立てて、眼鏡をかけてじつと見ましたが、

「これは、先日の仏像であるかな。」と、げげんな顔つきをしてたずねました。

「さようでございます。」と、男は、頭を下げた。

「いや、違う。先日見たのは、たしかに手が欠けていた。私は

その欠けたぐあいだが、たいそうおもしろいと思つて気に入つたのだが……。」「と、金持ちはいいました。

「じゃ、あなたは、手の欠けているのがよろしいのですか、それなら家にありますか。」「と、男はいいました。

すると、金持ちは、目を丸くして、

「家にある……まだ、これと同じ仏像が家にあるのですかい。」「

「さようでございます。手の欠けたのなら、家にあります。」「

「いや、それなら、私は、よしておこう。天下一品と聞いて、つい買う気になつたのだが、そういくつもあつては、もう欲しくはない。そういえば、あまりこの仏像も好い作ではないようだ。」「と、金持ちのようすは、急に変わりました。

男は、失敗しつぱいしてしまいました。その家いえを出でると、彼かれは、残ざんね

念んでたまりませんでした。うまくゆけば二つで二千三百両りようになるものと思おもいますと、ほんとうに取り返かえしのつかない、失敗しつぱいをしたと気づききました。彼かれは、どうかしてこの埋うめ合あわせをしなければならぬと思おもいました。

「村むらの大だい尽じんに、高たかく売うりつ付けてやろう。」と、男おとこは考かんえました。

男おとこは、家いえに帰かえり、今こんど度は、失しつぱい敗ばいをしないつもりで、手ての欠かけた仏ぶつ像ぞうをふろしきに包つつんで、村むらの金かね持もちのところへ持もって出でかけました。

金かね持もちは、男おとこがやってくる、にこにこして迎むかえました。

「じつは、おまえさんが見みえるだろうと思おもって、待まっていた。あ

の仏像ぶつぞうを持ってきたかい。」と、金持ちかねもはいいました。

「さようでございます。」と、男おとこは、さつそく、包みつつを解といて仏像ぶつぞうを出だしました。

金持ちかねもは、仏像ぶつぞうを取り上あげて、つくづくと見みていました。

「天下一品てんか びんの代物しろものでございます。千五百両りょうで買かっていたときと、うぞんじます。」と、男おとこはいいました。

「千五百両りょうでも、二千両りょうでも買かうが、惜おしいことには手てが欠かけている。私わたしは、もとから傷物きずものは大だいきらいなんだ。千両りょうでも、じつは考かんえているんだ。」と、金持ちかねもはいいました。

「なににしても、いい作さくでございます。」

「ああ、作さくは、まず申もうし分ぶんなしといっておこう。ただ、手ての欠かけ

ているのが惜しい。」と、金持ちはいいました。

男は、もう一つの完全なほうを、ここへ持つてくれば好かつたかとまどいました。

「じつは、先祖の時代から、もう一つほかに同じ仏像が伝わっています。そのほうなら、手も完全でございます。」と、男はいいました。

すると、金持ちは、喜ぶかと思いのほか、手に持つている仏像を下に投げるように置きました。

「この詐欺師めが、天下一品に、二つあつて、たまるものか。おまえは、あの物識りとぐるになつて、俺に、やくぎ物を買わせようたくらんだにちがいない。そんな量見だと、この村から

追おい出だしてしまうぞ！」と、金持かねもちは、たいそう怒おこりました。

男おとこは、もはや、取とり付つく島しまがなく、そこから逃にげるようでに出でま

したが、なんだか、いままでのことが、みんなはかない夢ゆめであつ

たというような気きがして、いま、はじめめて目めが覚さめたのでした。

田圃たんぼを通とおると、ほかの田圃たんぼは、みんなよくしげつていいできで

したけれど、自分じぶんの田圃たんぼばかりは、草くさが茫ぼう々ぼうと生はえていました。

そして、みんなから、大金持おおがねもちになつたといううわさをたてら

れているだけに、明日あすから、また田圃たんぼへ出でて、草くさを取とる気きにもな

れず、男おとこは、二つの仏像ぶつぞうをいまいましそうににらんで、あきれ

たように家いえのうちに閉とじこもつていたそうであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「北國新聞」

1922（大正11）年1月1～2日

※表題は底本では、「天下《てんか》——品《びん》」となっております。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

天下一品

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>